

三河鳳来町大室神社の人形芝居の「かしら」から

— 三人遣い「かしら」の初期形式のひとつ —

大谷津 早苗

一、はじめに

愛知県南設楽郡鳳来町上吉田にある大室神社には、近世の人形芝居のかしらと衣裳が残っている。その数、数十点。手・足等もあるので、三人遣いのかしらと考えられる。そのうち、かろうじて、かしらといえるものは二三点、それも顔面と頭部が分離しているものが多い。かしらの塗りも、ほぼ剝落してしまっていて、かしら・ど木・胴串等は離れている状態である。

当地のかしらは、永田衡吉著『日本の人形芝居』⁽¹⁾にも取り上げられておらず、その後も紹介されたことはなかった。

そもそも人形のかしら、特に地方に散在するかしらは、近世の人形芝居研究上、その史料的价值をあまり認められてこなかったものである。従来の人形芝居研究は、あくまで文献が主であった。一方の、近世において人形芝居を実際に演じていたかしらも、当時の人形芝居を知る手がかりにならないはずはない。かしらの形式・機巧

が人形の操り方、ひいては演技・演出と深く関わっている以上、文献では埋められない歴史の空白を埋めることのできる可能性を有しているのではないだろうか。かしらは、人形芝居の発展過程の中で捉えらえることによって、歴史資料としての価値をもつことになると思う。

当資料は、人形芝居が近世初期に興り、江戸時代を通して発展・展開していく過程において、三人遣いがどのような形で生まれて発達してきたかを物語る資料が少ない中で、意味を持つと思われるものである。

二、かしらに関する問題点

人形芝居のかしらには、様々な構造をもったものがある。そのかしらに関しての一番大きな問題は、それらのかしらの前後関係、即ち、どれが古く、どれが新しいか、ということである。

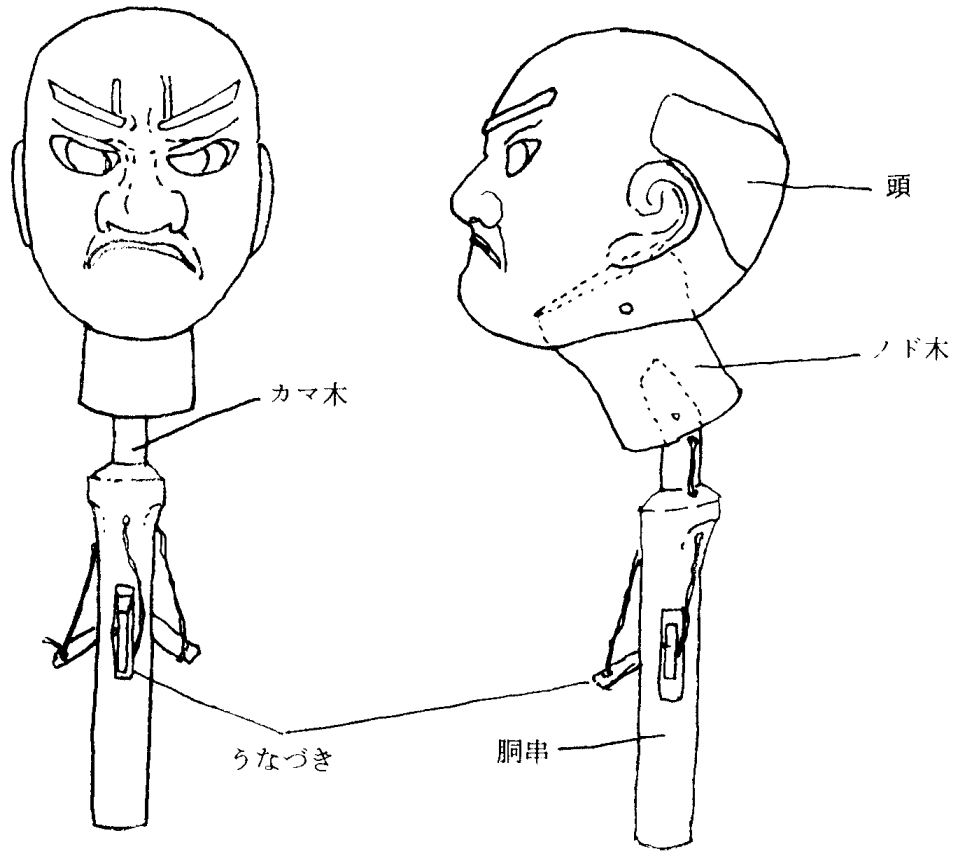
この問題について、特に三人遣い「かしら」の前後関係の考察は、平成九年度芸能学会研究大会において口頭発表し、⁽²⁾同学会誌『藝能』五号（平成一一年二月一日発行予定）に投稿を予定しているが、以下、その概略を記しておく。

(1) かしらの構造について

いわゆる一般的な三人遣いのかしらは、⁽³⁾図1に示したように、頭部、のど木、頭・のど木を支える、握り手でもある胴串⁽⁴⁾からなる。頭部はくりぬきになっていて、内部には目・眉・口等を動かす機巧

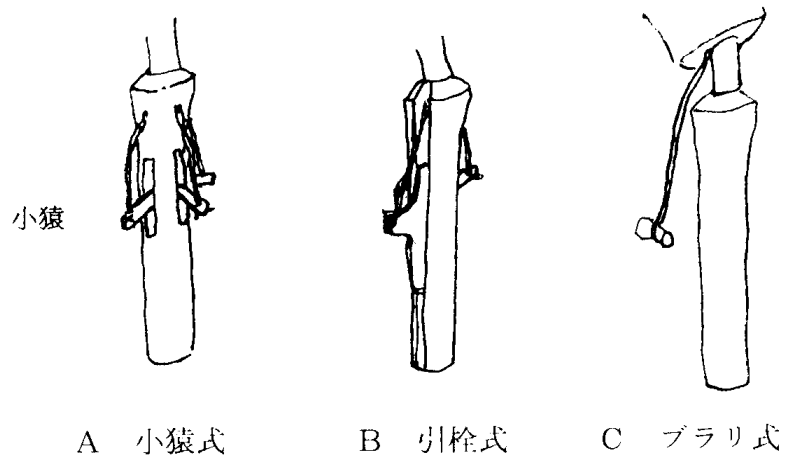
図1 かしらの構造

が施されているものも多い。また、しばしばかしらの制作者の名前、制作年等が記されていることがある。この頭部とのど木は、楕円形の小判という穴にはめ込む形で、また、のど木と胴串はかま木が繋ぐ形で接続している。



胴串は、多くの場合、正面にかしらのうなづきを操作する機巧が、裏面に目・眉・口等を動かす曲がついている。うなづきを操作する機巧のことを、文楽ではチョイというが、ここでは「うなづき」で統一して用いることとする。

図2 うなづきの形式



(2) うなづきの形式

ここで注目したいのは、うなづきの形式である。うなづきの形式には、主として三つの形式が見られる(図2参照⁵⁾)。一つは、頭の内部からひいているうなづきの糸を胴串に固定してある木片に結びつけ、木片を上下に動かすことで頭部を上下させる操り方で「小猿式」と呼ぶ(図2のA)。胴串裏面にある目・口・眉等を動かす曲もこの形式で、これも小猿といっておき、この小猿と同形なので「小猿式」と呼ぶ。次は、胴串正面の溝にカタカナのト型の木片を上下にすべらせることで頭部分をうなづかせる操り方の、「引栓式」である(図2のB)。もう一つは、うなづきの糸の先にまるめた紙等をつけ、それによって糸自体を引いてうなづかせる操り方で、「ブラリ式」という(図2のC)。

以上の三形式は、実際に人形を操る場合の技術的な面において、また、人形の表現効果において、どのような違いがあるのだろうか。

三形式の中で、技術的に最も難しいのが「引栓式」である。技術的にはむずかしいが、糸のついたト型の木片を溝にすべらせて操作するので、頭部を上下にうなづかせるのに微妙な動き、微妙なうなづき加減が可能である。つまり、人形の表現効果からいえば、微妙な動きによって細やかな感情表現、写実的な感情表現ができるのが、「引栓式」である。「引栓式」の特徴はこの点にあると思う。現在の文楽は「引栓式」を用いている。

一方、「小猿式」は、技術的には「引栓式」より容易である。反面、人形の動きに微妙な調節が難しく、人形の表現の上では、「引栓式」に比べて荒く、大きな動きになる。これらは「ブラリ式」も同様である。この点が「小猿式」「ブラリ式」と「引栓式」の違いである。

「小猿式」「ブラリ式」は、技術的にも表現効果の上でも同様であるならば、同系の形式とみることができよう。そうすると、うなづきの形式は、「引栓式」と「小猿式」・「ブラリ式」の二形式と考えることも可能である。

以上の形式は、それぞれいつごろ考案されたのだろうか。

「ブラリ」は、江戸時代の文献には見あたらないが、「引栓」「小猿」という語は、『浄瑠璃譜』(寛政一七八九〜一八〇〇頃)の成稿)にみられる。

西は引せん、東は小猿迄も。(中略) みなみな東西に流あり。

これは、延享四年(一七四七)の「悪源太平治合戦」の解説中の一文である。

周知のように「西」は竹本座、「東」は豊竹座のことである。「引せん」「小猿」はそれぞれうなづきの形式をいっている。即ち、竹本座と豊竹座では、様々な流儀の違いがあるが、その違いの一つとしてうなづきの形式も、竹本座は「引せん」式、豊竹座は「小猿」式

と、それぞれに流儀があるものだ、という意であろう。

この記述により、『浄瑠璃譜』が書かれた寛政頃は竹本座と豊竹座で、それぞれ違ったうなづきの形式を用いていたことはわかる。しかし、『引栓式』と『小猿式』に時間差、前後関係を見出すことはできない。また、この形式の違いを、三人遣いが完成したといわれる享保年間（一七一六〜一七三五）まで遡って考えることも不可能であろう。

(3) かしらの分布状況から一周圍論による解釈

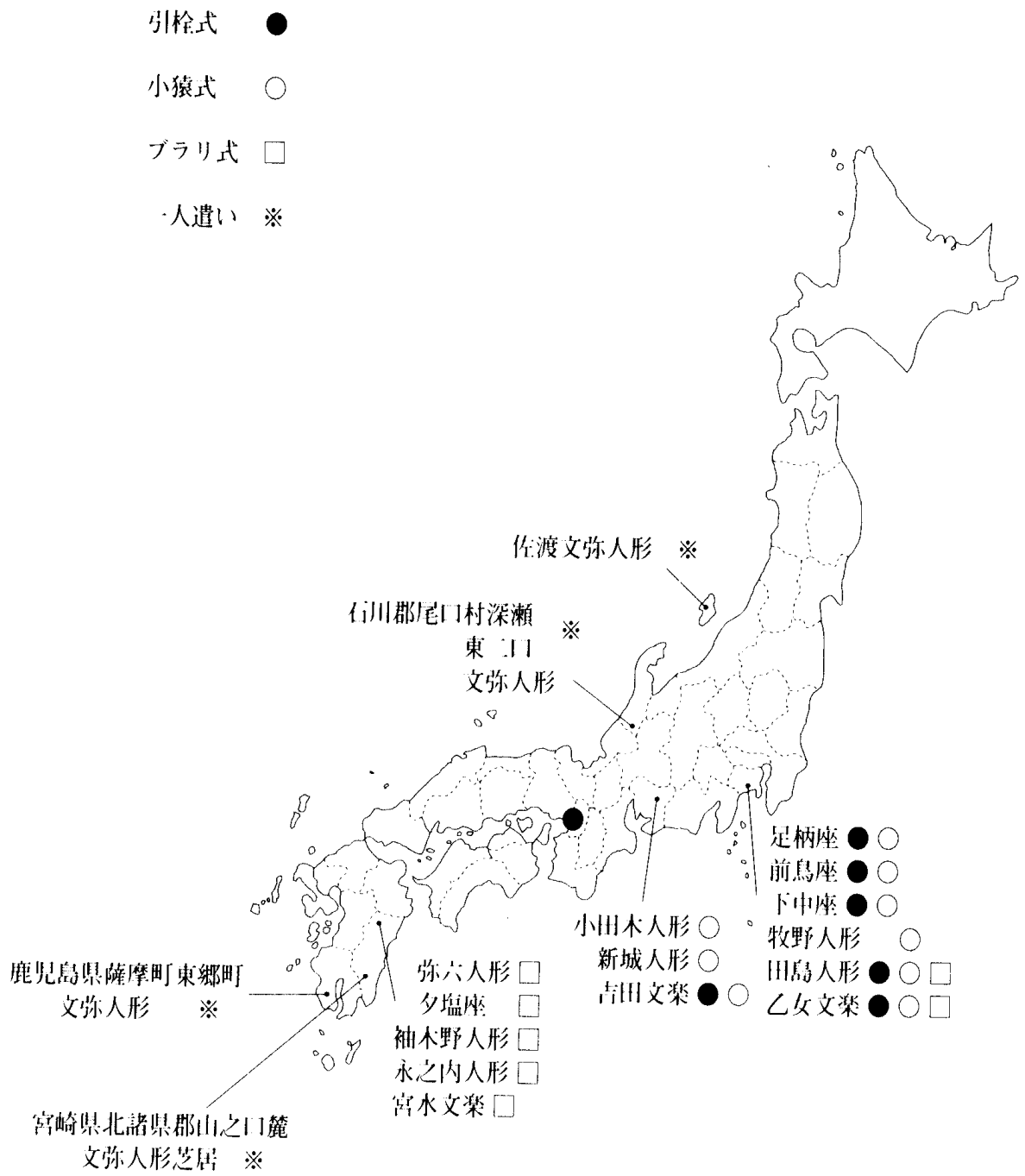
「引栓式」「小猿式」が考案された時期や前後関係がわかる文献は、管見ではみあたらない。そこで、それぞれの形式の分布状況から、前後関係を考えてみることにする。

考察のもとにする資料は、一九九七年三月から十一月の間に調査した一四ヶ所、かしら総数四三六、調査結果は以下の通りである。これをみると、「引栓式」は、今の文楽に用いられているので大阪には当然多くあるが、地方にはごく一部しか分布していない。地方に分布しているのは、「小猿式」と同系の「ブラリ式」が圧倒的に多いということがわかる。永田衡吉氏は、『日本の人形芝居』でこの結果を予測しており、調査結果は氏の説を裏付ける結果となった。

この調査箇所に、現在の文楽の地である大阪、一人遣いの伝承地の鹿児島薩摩郡東郷町・宮崎県北諸県郡山之口の文弥人形芝居（共に一九九六年調査済み）・佐渡の文弥人形・石川県石川郡尾口村の文弥人形を加え、分布図にしたものが、図3、かしらの分布図

| 〔かしら所在地〕 | 〔かしら総数〕 | 〔小猿〕 | 〔引栓〕 | 〔ブラリ〕 |
|-------------------------|---------|------|------|-------|
| 神奈川県 相模人形芝居 | | | | |
| 足柄座（南足柄市郷土資料館蔵） | 57 | 45 | 6 | 0 |
| 前鳥座（平塚市四之宮公民館蔵） | 50 | 23 | 15 | 0 |
| 下中座（小田原市役所橋支所蔵） | 55 | 47 | 2 | 0 |
| 牧野人形（神奈川県歴史博物館蔵） | 21 | 16 | 0 | 0 |
| 田島人形（小田原郷土文化館蔵） | 18 | 5 | 2 | 1 |
| 乙女文楽（平塚市博物館蔵） | 56 | 3 | 18 | 28 |
| 愛知県 | | | | |
| 小田木人形（北設楽郡稲武町郷土資料館蔵） | 50 | 20 | 0 | 0 |
| 同（同 小田木八幡神社蔵） | 1 | 1 | 0 | 0 |
| <新城人形>（新城市文化会館蔵） | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 吉田文楽（豊橋市旭町鈴木三千雄氏蔵） | 32 | 26 | 1 | 0 |
| 宮崎県 | | | | |
| 弥六人形（東臼杵郡諸塚村中央公民館蔵） | 6 | 0 | 0 | 3 |
| 夕塩座（西臼杵郡高千穂コミュニティセンター蔵） | 19 | 0 | 0 | 14 |
| *一部袖木野人形、永之内人形を含む。 | | | | |
| 袖木野人形（高千穂町袖木野下組公民館蔵） | 35 | 0 | 0 | 33 |
| 永之内人形（岩戸小学校蔵） | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 宮水文楽（西臼杵郡日之影町甲斐一心氏蔵） | 32 | 0 | 0 | 26 |

図3 かしらの分布図



である。

この図を見ると、近世人形芝居の発祥地であり、現在の文楽の地でもある大阪を中心に円を描いていった場合、中心の円に「引栓式」があつて次の円に「小猿式」が広く分布し、そして大阪から一番遠い円に一人遣いの伝承地がある、ということがわかる。

一人遣いの円には「小猿式」はない。中心地である大阪の文楽はすべて「引栓式」で、「小猿式」は全く用いられていない。愛知、神奈川等に広く分布している「小猿式」の円には「引栓式」が少し入っている状況である。「小猿式」と同系と考えられる「ブラリ式」の分布地の宮崎県高千穂近辺に「引栓式」は入っていない。

これは、民俗学でいう周圏論で解釈可能な分布状況だと考えられる。既によく知られているように、周圏論の考え方は、新しい現象が発生すると古いものが周辺部に押しやられ、その過程が繰り返されるうちに古い現象の層が、中心部から周辺部へだんだん押しやられて輪のように形成される、したがって、その外側の層のものほど発生が古い、という考え方である。

周圏論の立場でこの分布を解釈すると、「引栓式」「小猿式」も時間差が考えられる。即ち、一番外側の円の一人遣いが最も古く、一つ内側の円の「小猿式」が、次の段階で分布した二番目に古い形式、そして、中心部に近い「引栓式」は最も遅く分布した、一番新しい形式、とるみことができよう。

一人遣いは、ある時期、外層部だけではなく広く分布していたに

ちがない。それが次に新しい「小猿式」が入ったためになつていったのだろう。「小猿式」がこれだけ広く分布しているということは、かなり長い間用いられていたことを物語る。「引栓式」は、中心部以外は、その周辺の狭い範囲に分布しており、数も少ない。したがって、時期としては一番遅く、短時間に分布したと考えられるのではないだろうか。

この考え方で、先の「浄瑠璃譜」の記事にあたってみると、寛政頃は確かに竹本座・豊竹座で「引栓式」「小猿式」の区別があつたのだろう、しかし、区別ができる前段階では竹本座も豊竹座も「小猿式」であつたのではないか、即ち、「三人遣い発生当時（享保頃）」は竹本座も豊竹座も「小猿式」であつたのではないか、と考えられるのである。

(4) まとめ

うなづきの形式の分布状況を周圏論を用いて解釈することによって、それぞれの形式に時間差を考へることができたと思う。即ち、最も古い形が一人遣いで、次の段階が三人遣い（小猿式）、そして最も新しい形が三人遣い（引栓式）という発展過程を経ているのではないか、という仮説を立てたのである。これは、全国的な視点に立つことによつて見えてきたことであつた。しかし、これは、あくまでかしの全国調査の途中で思いついた仮説である。総合的な判断を下すには、より多くの資料を収集する必要がある。よつて、今後にも更に調査をすすめる、資料を収集し、先の仮説を確実なものにして

いきたいと思う。

三、大室神社のかしらについて

当地のかしらは、人形芝居の発展過程の中で、どのあたりに位置

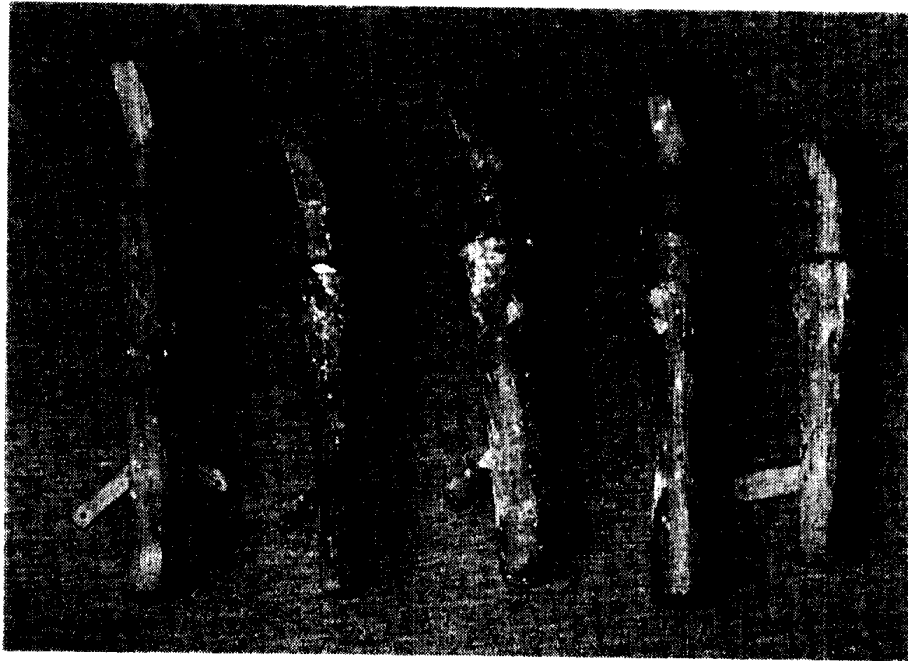


写真 1

付けることができるのだろうか。

当地のかしらの大きな特徴は、胴串のうなづきの形式がすべて「小猿式」であるということであろう(写真1参照)。加えて、ほとんどのかしらが、目・眉・口等を動かす機巧のないものであるというところもあげられると思う(後にあげたかしらの写真参照)。

「小猿式」は、前述したように、うなづきの形式から見た場合、三人遣いの初期の形式と判断できる。また、主役級のかしらでも器官を動かす機巧がないかしらは、顔面の機巧の発達過程のうえでも、初期的な段階と見ることができるとはならないだろうか。

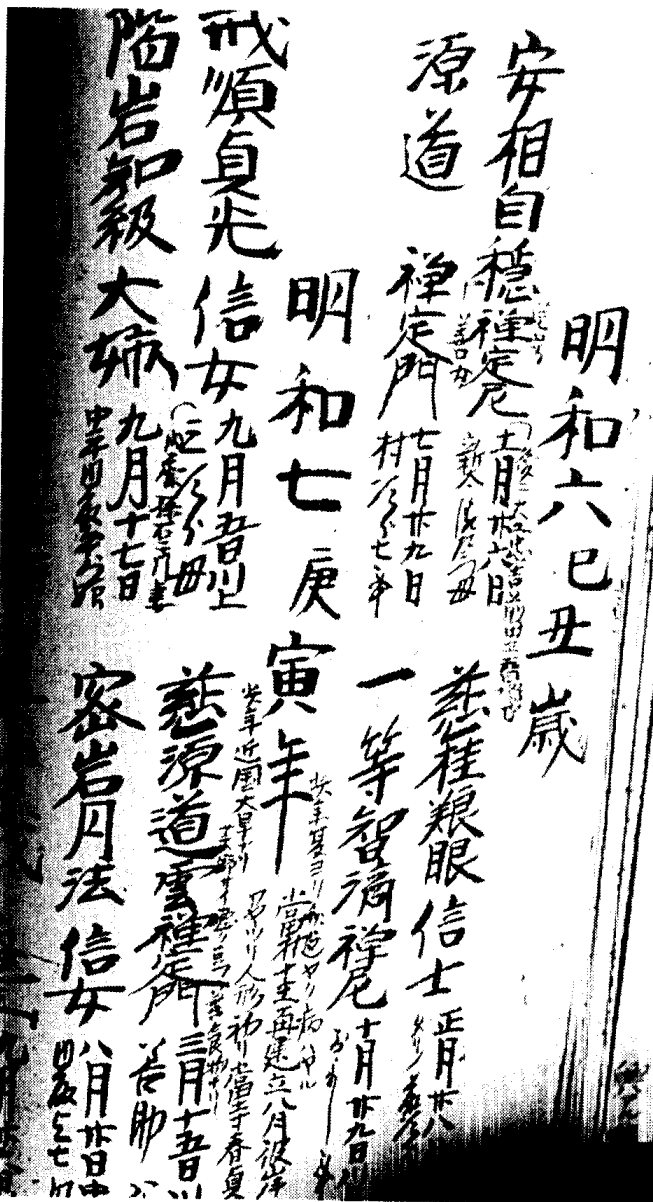


写真 2

当地には、上演記録も残っている。大室神社そばの、金光寺（現在廃寺）の過去帳に書き込まれている（写真2）。明和七年（一七七〇）の項に、その年の出来事として、

明和七庚寅年

此夏ヨリ秋迄ヤク病ハヤル

當村十王再建立八月彼岸入仏：

アヤツリ人形初り當寺春夏作：

此年近国大旱ナリ

菜野サイ恵ク豆ノ葉食物ナリ

と記されている。「アヤツリ人形初り」とあるので、明和七年には金光寺において、「アヤツリ人形」がはじまったことがわかる。

また、この近辺一円には他にもかしらが点在おり、この辺り一円で、さかんに人形芝居が行われていたことが裏付けられている。その中の一つに、北設楽郡小田木の人形のかしらがある。小田木の人形も、うなづきの形式はすべて「小猿式」で、顔面の器官を動かす機巧もきわめて少ない。これは、当地のかしらと同様である。つまり、大室神社のかしらは小田木の人形と、同系とみなすことができよう。その小田木には、宝暦三年（一七五二）の銘のあるかしらがある。宝暦三年といえ、三人遣いが行われるようになってまもない頃である。当地のかしらが、小田木と同系と考えられるところか

ら、当地のかしらも、その時期あたりまで遡ることができるとも思われる。いずれにせよ、当地のかしらは、三人遣いの初期の形式の一つと考えられるのではないだろうか。

この辺りには、三人遣いだけではなく、一人遣いも演じられた記事がある。

信州下伊那郡天竜村坂部の郷主であった熊谷家に伝わる『熊谷家伝記』六ノ卷⁽⁸⁾には

正保四年亥四月八日、吉岡へ幅下団兵衛という操芝居名古屋より参り、興行の由。(中略)近辺皆誘引て大勢見物に行。吉岡群衆する事市をなすがごとし。

とある。

また、太田白雪の『新城聞書』⁽⁹⁾の三河新城の記事に、

寛文三癸卯歳、間ノ町庚申堂ノ向ノ野ニテ、野村勘之丞操り芝居アリ。

寛文四申辰ノ歳、(中略)生嶋喜太夫、虎屋源太夫、ニ芝居トモニアヤツリ、同所ニテアリ。伊勢嶋宮内操芝居、上町金左右衛門 屋敷ニテ有。薩摩太夫操芝居、東新町、今ノ惣右衛門屋敷ニテ有。

と記されている。正保、寛文頃というと、一人遣いの時期である。ここで演じられた操り芝居は一人遣いと考えられる。即ち、この辺りでは、三人遣いの以前にも、人形芝居があったのである。それは一人遣いの人形芝居であり、当地の三人遣いは一人遣いと関連も

《大室神社のかしら》 大室神社所蔵

凡例

- ・このデータは1997年12月24日の現地調査の結果をもとにしている。その中で、かしら23点についてまとめたものである。
- ・かしらは、仮に上吉田1、上吉田2…と番号を付す。番号は調査順である。
- ・主なデータは写真、かしの寸法、かしの材質、毛髪他である。毛髪については植毛の場合のみ記載した。
- ・寸法の単位はcmである。
- ・かしの寸法は、面長と面幅をあげる。面長は頭頂部から顎下までを、面幅は左右の幅を耳下で計測した長さである。

| かしら番号 | 面長 × 面幅 | 材質 | 毛髪 | 備考 |
|-------|----------|----|----|--------|
| 上吉田1 | 13.5×8.8 | 檜 | 植毛 | 男 立ち眉跡 |
| 上吉田2 | 10.4×6.9 | 桐 | | 子役カ |
| 上吉田3 | 10.5×7.1 | 桐 | 植毛 | 男 |
| 上吉田4 | 13.8×9.1 | 桐 | 植毛 | 男 |
| 上吉田5 | 11.4×7.8 | 桐 | 植毛 | 女 |
| 上吉田6 | 10.5×7.4 | 桐 | | 女 |
| 上吉田7 | 11.6×7.3 | 檜カ | | 女 |
| 上吉田8 | 11.0×7.8 | 桐 | | 男 |
| 上吉田9 | 13.2×8.7 | 桐 | 植毛 | 男 |
| 上吉田10 | 12.6×8.2 | 桐 | 植毛 | 男 |
| 上吉田11 | 10.6×7.5 | 檜 | | 子役カ |
| 上吉田12 | 10.6×7.5 | 檜 | | 道化カ |
| 上吉田13 | 12.1×8.0 | 桐 | 植毛 | 女 |
| 上吉田14 | 13.5×8.7 | 桐 | 植毛 | 男 |
| 上吉田15 | 10.6×7.3 | 檜 | | 子役カ |
| 上吉田16 | 12.5×8.1 | 檜 | 植毛 | 男 |
| 上吉田17 | 9.2×6.6 | 桐 | | 子役 |
| 上吉田18 | 10.0×7.1 | 桐 | | 子役カ |
| 上吉田19 | 13.5×9.0 | 檜 | 植毛 | 男 |
| 上吉田20 | 11.2×7.6 | 檜 | | 男立ち眉跡 |
| 上吉田21 | 13.7×8.8 | 桐 | | 男顔面のみ |
| 上吉田22 | 11.2×7.5 | 桐 | 植毛 | 女顔面のみ |
| 上吉田23 | 11.7×8.1 | 桐 | | 不明 |

考えられないことはない。
人形芝居の発展過程の中で、三人遣いがどのように生まれて発達

していったのかを物語る資料はそう多くない。その中において、当地のかしらは歴史資料としての価値をもつといえよう。



上吉田 3



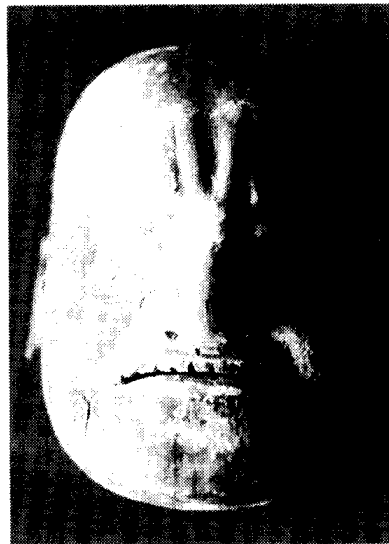
上吉田 2



上吉田 1



上吉田 5



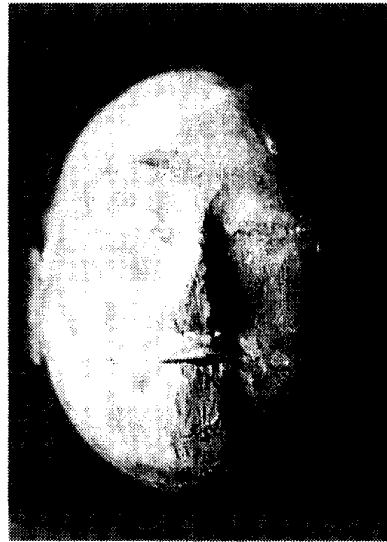
上吉田 4



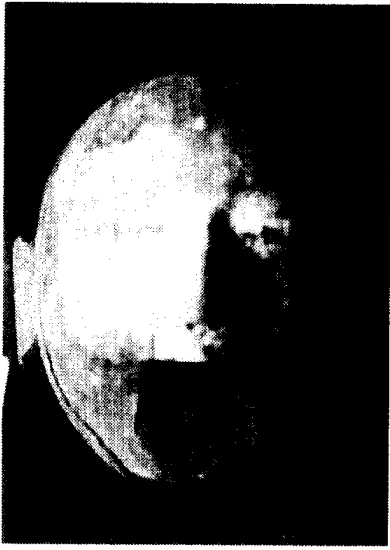
上吉田 8



上吉田 7



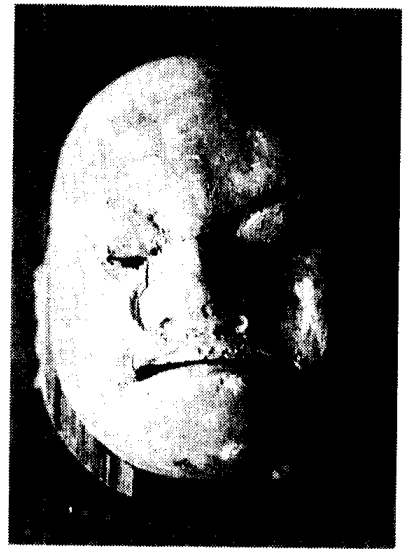
上吉田 6



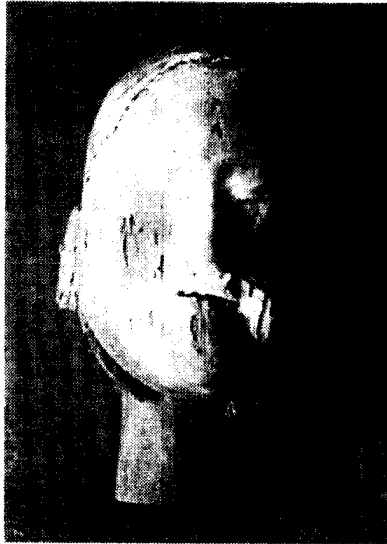
上吉田11



上吉田10



上吉田9



上吉田13



上吉田12



上吉田16



上吉田15



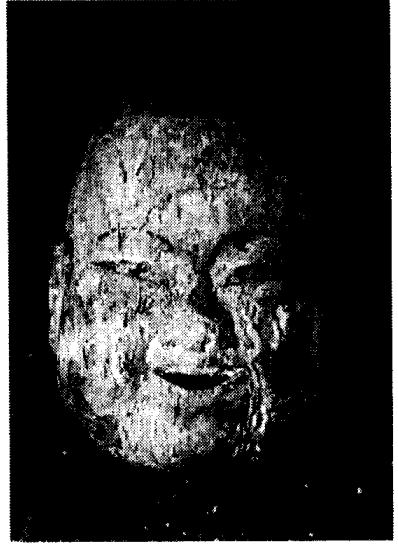
上吉田14



上吉田19



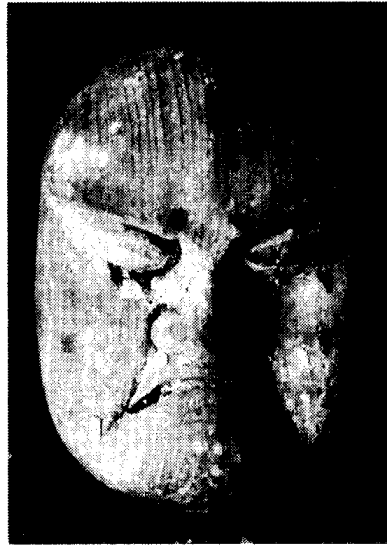
上吉田18



上吉田17



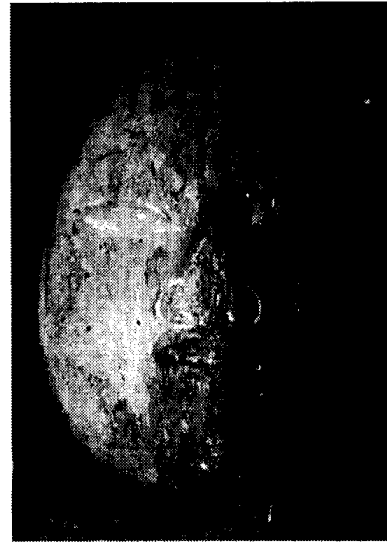
上吉田21



上吉田20



上吉田23



上吉田22

注

- (1) 『日本の人形芝居』（錦正社・昭和四四年三月二五日）。
地方人形芝居の研究書で、当時、かしらの伝承地として全
国一八三ヶ所を確認している。
- (2) 平成九年一月二三日、於二松学舎大学。発表題目「人形
浄瑠璃の操り方について―地方人形のかしらから―」。
- (3) 『飯田市美術博物館調査報告―伊那谷の人形芝居―か
しら目録台帳』（飯田市美術博物館・平成三年三月三一日）
のかしらの構造図に倣い、作成。一二六頁
- (4) 文案では「胴串」と呼ぶ。「心串」という呼称もある（淡路
など）。
- (5) 注(3)に同じ。この他、少数ながら偃齒式がある。
- (6) 『帝國文庫 近松世話浄瑠璃集』（博文館・昭和三年七月一
五日）所収。七・二七頁
- (7) 注(1)に同じ。「現存するかしらの八〇%以上を占めるで
あろう」五四〇頁
- (8) 『熊谷家伝記』全八巻。『熊谷家伝記』六ノ巻（愛知県北設
楽郡富山村教育委員会・昭和六〇年一二月）。四頁
- (9) 鈴木太吉編『太田白雪集』（新城市教育委員会新城市郷土研
究会・昭和三五年一月一日）所収。二二三頁

付記

今回の調査にあたり、鳳来町教育委員会居澤正典氏、鳳来町文化
財専門委員林正雄氏、そして大室神社氏子の方々にたいへんお世話
になった。記して厚く御礼申し上げます。